

まちづくりの今とこれから

生活環境学科では、2019年度入学生から新しく6コース体制になり、「まちづくりコース」がスタートしました。そこで、最近のまちづくりの動向に触れながら、「まちづくりコース」がどのような教育をおこなうのかについて座談会を開催しました。本学教員が、住まいや行政の視点だけでなく、インテリアデザインやアパレルの立場からも「まち」について語っています。

水野優子 × 鎌田誠史 × 坂口建二郎 × 北原摩留



——本日は、お集まりいただきありがとうございます。ただいまより座談会を始めさせていただきます。本日は、まちづくりに関する最近の動向や課題、課題の解決方法と、そのためには、まちづくりに携わるどんな人材が必要か、その人材をこの学科でどのように教育していくのかを中心に、お話しいただければと思います。

まず、自己紹介をお願いします。では、水野先生お願いします。

水野 水野です。よろしくお願いします。私自身は、都市計画とかまちづくりが専門なんですけれども、特に研究テーマとしているのが郊外住宅地とか、ニュータウンで、団地のような計画的につくられた住宅地の研究をしています。こういう計画的につくられた住宅地の中でも、特にオールタウン

といいますが、高経年の住宅地の再生とか、暮らしの再生に興味があります。

そういった住宅地の研究と、あと、「集まって住もう」という視点からマンションの維持管理や空き住戸の流通についての研究にも取り組んでいます。

——ありがとうございました。では、鎌田先生、お願いします。

鎌田 まず実践的な研究としては、僕も水野先生と同じように計画的につくられた住宅地に興味を持っていて、「ガーデンシティ舞多聞」(図1)という神戸にある自然住宅地^{*1}を住民参加型でつくるプロジェクトを5年ぐらいやっていました。

——きれいな住宅地ですね。



水野優子 みずの ゆうこ

住環境計画、都市計画、まちづくり、住宅政策

戦後の高度成長期に計画的につくられたニュータウンや郊外住宅地、団地などは、長い年月を経て、現在の人口減少社会、少子高齢社会において、さまざまな課題を抱える地域が多く存在する。これらの住宅地の再生や継承、それに関連する主体や担い手のあり方、地域運営等を主な研究テーマとする。また、近年では、高経年集合住宅の空き室流通促進や、移住等の新たなライフスタイルによる地方再生も新たな研究テーマとして取り組む。

坂口建二郎 さかぐち けんじろう

被服意匠学、被服構成学

現在、クリストバル・バレンシアガに関して研究を進めている。彼はファッションデザイナーでありながら「裁断の魔術師」と呼ばれている。しかしながら、彼の技術を分析した文献などの存在は不明であり、作品の写真以外は何故彼がそう呼ばれたのかを判断できるものが見当たらない。この課題は、立体裁断の研究を行っている間に遭遇したものであり、この課題に対する解析を整えることで、平行して進めている「現代ファッション史」の研究へも余波が生じることを期待している。

鎌田誠史 かまた せいし

東アジアの集住空間、住環境、地域デザイン

専門分野は東アジアの集落研究、住環境・地域デザイン。首里城復元整備をはじめとする沖縄県の世界遺産及びその周辺整備、神戸市の自然住宅地「ガーデンシティ舞多聞」プロジェクト、福岡県大牟田市全域の空き家実態調査とその活用、芦屋市の芦屋浜高層団地再生プロジェクトなど数多くの建築設計やまちづくりに従事している。集落研究の分野では編著に『「抱護」と沖縄の村落空間—伝統的地理思想の環境景観学』（風響社、2019年）がある。

北原摩留 きたはら まる

インテリアデザイン、建築設計、プロダクトデザイン

レストランやショップといった商業空間や、オフィスなどのインテリアデザインワーク（家具を含む）が専門分野。その空間を訪れ、滞在する人々に少しでも居心地よく楽しい時間を過ごしてもらえるようなデザイン上の提案をずっと考えている。

現在は、東京にあるレストランのリニューアルに伴うインテリアデザインに取り組んでおり、客席は個室中心としたいというクライアントの希望に対し、いかに閉塞感のない個室空間を創出できるかが最近の課題。

インタビュー・編集/日置理恵、司馬麻未、坂田彩美 撮影・デザイン/津田井美香 編集責任/黒田智子、井上雅人

鎌田 そうですね、地形に沿った住宅地ですね。塀もないし、電柱もない。しかし、ルールはかなりあるというような。緑を徹底的に残しながら、住宅をどう配置していくかや、住宅も庭も設計する。住民と一緒に、住まう前にコミュニティをつくってしまうというプロジェクトに携われる機会がありました。その後、2011年から福岡県の大牟田市に住んでいました。かつて炭鉱で栄えた大牟田市は高齢化が突出しています。36.3%^{*2}の高齢化で、程度の良い空家が1,000軒、倒壊危険家屋が400軒もありました。空き家の実態を調べて、地域の医療とか介護とかも含めて空き家を活用するためのシステムの開発を一緒に考えたり、実際に学生と空き家を直したり、

それをサロンにして空き家を地域に開放するというようなことをやっていました。

学術的な研究は、「集まって住む」ことにすごく興味があるので、沖縄やその他東アジアの伝統的な集落の空間構成をずっと調査してきました。いろいろな古い資料を求めて、それを重ね合わせながら、近世期の集落の形態、環境がどう生き伸びてきたのかに興味を持って研究してきました。あと中国や台湾とかに行って集落がどのように住まわれているかの調査をしてきました。

——ありがとうございます。では、北原先生よろしくお願いします。

北原 僕は研究活動よりも実践的なデザインワークが中心



図1 ガーデンシティ舞多間みつけプロジェクトの住宅（神戸市垂水区舞多間東）

で、商業空間のインテリアデザインを現在まで20年以上やっています。水野先生、鎌田先生が研究対象にされている住空間は毎日の話ですが、商業空間っていうのは、そこでごはんを食べたり物を買ったりするために数分から数時間程度滞在するという点で、非日常的なところがあります。

例えばレストランに行っても、ショッピングに行っても、訪れる人のお目当てはあくまでおいしい料理だったり欲しい商品だったりするわけで、床の素材だったり椅子の張地といった具体的なインテリアのデザインなんてほとんど気に留めていないわけですよ。でも、強い印象には残らないとしても、何か気持ちのいい空間で楽しい時間を過ごせたねと思ってもらえるよう、黒子的な役割ですけどデザインにできることはたくさんあるんじゃないかとずっと思っています。

———ありがとうございました。では、坂口先生よろしくお願いします。

坂口 今までの人生、そのエネルギーをほかに使うところがなかったのかというぐらい、ファッション産業と、現在は教育ですけども……ほとんどの時間をファッションに費やしてきました。

小学生時代から、着ることや、つくることに興味があって、いつの間にか仕事にしていこうと早々に決めたとわけなんですけど、そのころから自分のファッション生活というのが始まったのかな。もう本当に長きにわたって、ファッションと向き合ってきたかなと思っています。

そういったところを生かしまして、被服の意匠学……デザインということですが、それと構成学、いかにして衣服はつくられるのかを、大学の中では教授しています。企業では、パターンメーカーを中心としてキャリアを重ねていったのですが、海外ライセンスブランドでの承認作業であったり、生地の買い付けであったり、店頭に出て商品説明や、店頭ディスプレイということもこなしていくというふうな、非常に多

岐にわたったことを経験することができて……当時は大変だったんですけども、今になって思えば、関連した科目をこれだけ持てていることにうれしくも思いますね。

———ありがとうございました。

まちづくりコースに向けて

———では、水野先生と鎌田先生に、まちづくりコースへの思いや、まちづくりに関して、どのような事例があるか、どのような取り組みがされているか、お二人の心に残っているものを教えていただけたらと思います。

水野 そもそも「まち」とは何か、ということだと思うのですが、「まち」は建物や道路、公園といった形あるものだけでなく、そのうえで暮らす人の生活や文化、そして長い年月で培われてきた歴史なども含めて「まち」なんですね。

そうした「まち」をみたときに、人口減少や空き家の増加、高齢化の進展、孤独や格差など、日本全体の課題がいろいろと出てきているわけです。戦後から現代にかけて、経済が右肩上がり、これからもずっと豊かになる幻想のなかで「まち」がつけられてきましたが、ちょうどいま、価値観の転換やリサイズすることがもとめられているのだと思います。課題は多くありますが、一方で「まち」がすっかりだめになったかというそうではなくて、「まち」をしっかりと見つめて、産業や歴史、コミュニティなど、地域ごとの特徴や魅力をとらまえて、活かしていく、ということが重要なのだと思います。

今回、まちづくりコースを立ち上げるにあたり、どういったことを学んでもらいたいのかということに関連するメンバーで何度も議論を重ねて、そうした地域の課題や魅力を把握し、地域や社会に根差す資源を活かしながら、まちに関わるさまざまな主体とともに「豊かな暮らし」に向けて行動できるよ

うになってほしいという想いを込めて、そこに向けたカリキュラムづくりをおこないました。

鎌田 今、水野先生がおっしゃったとおりなんです。私の観点からすると、やっぱり住まい方や、豊かな暮らしみたいところは、先ほどおっしゃったように地域とコミュニティにすごく可能性があるなと思っています。

戦後につくられたニュータウンで何の計画性もなくそのまま経済の論理でつくられたものはやはりそのまま衰退しているんです。総空き家化しているという事例もあります。ただ、このようなニュータウンの1戸を買うために一生お金を払いながら頑張ってきたわけじゃないですか。でも、もう資産価値がほとんどない家も多くあります。例えばきょう紹介したいのは、スペースRデザインの吉原さんという方がいらっしゃるんですけど……

水野 九州ですよ。

鎌田 九州です、そうそうリノベーションミュージアム冷泉荘(図2)。古い、もう60年ぐらいたったマンションなのに、入居待ちなんです。もちろん立地はいいんですけど、彼がやったのは、古いマンションをミュージアムみたいな形で、昭和の内装を残しながらリノベーションしていったら、すぐに埋まった。彼は古いマンションを、ピンテージビルという。言い方がいいですよ。

——物は言いようですね。

鎌田 そうそう。ピンテージビルということにして、人とつながるまちづくりで、小さい商店街をそのビルの1階でやってみたり、シェアしてみたりとかいろいろなことを頑張ってやってる。不動産という、まちづくりにそんなにかかわらなかった人たちが、アクションを起こしているんですよ。

水野 私もみせていただいたことがあります。古いマンションをコンバージョンしているんですよ。

鎌田 そうです、コンバージョンとリノベーションです。

水野 使い方を変えて、見方を変えることによって、ちょっとおもしろい空間、魅力的な空間になるんですよ。まちづくりって「つくる」っていう言葉がついているので、ついつい

住宅や建築を具体的に建てることを思い浮かべがちですけど、既にある物に改めて目を向けて、新たな価値を付加する、再生させるという流れがありますね。

鎌田 日本でも同時多発的に、各所で様々な取り組みがされていますね。

水野 そうですね。高度成長期にたくさんつくられた団地などでも、空き室を地域の食堂や子育て拠点に利用したり、二つの住戸を一つにつなげてシェアハウスやオフィス付き住宅にするなどの実験的な事例がたくさんあります。

鎌田 そうですね。新しい1つの産業になりつつあります。

水野 今、全国的に空き家率って14%^{*3}ぐらいなんですよ。

鎌田 はい、そうです。

——ああ、そんなに。

水野 それでも新築の住宅は毎年つくられていくわけですが、今あるストックをどう活用していくかというところにシフトしないとイケない世の中になっているという気はしますよね。

鎌田 そうですね、はい。

今の話で言うと、例えば東大の松村秀一先生の書籍^{*4}では、今までは建築をいっばいつくっていくという仕事が結構あったんですけど、先ほど水野先生がおっしゃったとおりで、活用する、つまり「場」としてより望ましい生活を展開することを構成する産業が、今から結構増えてくるんじゃないかとおっしゃっているんですよ。そういう新しい「場」をつくるということが、まちづくりの今後の目指すところになり得るんじゃないかと思えますね。

新しい公共空間

水野 あと、まちづくり、ということでは、今、住宅とか建物の話をしましたけれども、公共空間もすごく大切ななと思っています。例えば、公園。最近「パークマネジメント」^{*5}ということばもよく聞かれるようになりましたが、公園を従来



図2 リノベーションミュージアム冷泉荘(福岡市博多区上川端町)



図3 てんしば(大阪市天王寺区天王寺公園)

の行政主導の管理から、多様な主体が関わり、新たな使い方や維持管理をおこなうことによって、まちに大きな影響が出てくる事例がいっぱいあるんですよ。

大阪であれば、天王寺公園がリニューアルされて「てんしば」(図3)という愛称で2015年にオープンしましたが、これは、近鉄不動産が大阪市との協定により管理運営をおこなっているものです。天王寺公園は大阪を代表する公園ですが、それまでややもすると閉鎖的で周辺の分断要素となっていたものを、周辺に開いて、大きな芝生の広場をつくったんですね。また、その広場に面して、魅力的な店舗を入れて。そうすると、子ども連れのファミリーや若い女性など、今までと違った層が来てにぎわいが生まれる。このあたりだったら、神戸元町の東遊園地(図4)。

鎌田 アーバンピクニックですよな。

水野 ありますよね。東遊園地は神戸の中心にある公園で、もともとは、150年くらい前に外国人居留地の外国人専用の公園としてつくられた場所ですが、民間からの提案で公園を市民の交流拠点とするような社会実験がおこなわれ、アーバンピクニックや芝生化といったなかで新たな都市の魅力となり、その結果を踏まえて、本格的な再整備に取り組みつつあります。

そういうふうに、今あるものの視点や使い方を変えることによって、まちや人の流れが変わっていく。そういう発想力がある人を育てたいなと思ったりします。

鎌田 本当にとっぴもない発想じゃなく、生活に根づいてちょっと見方を変えるぐらいでもいいんですよ。実はそういう人材が必要で、多分うちの学生は結構上手にモノを見る力があるんじゃないかと思います。

——それは感じる事がすごくあります。

水野 そういう意味で言うと、現状をしっかりと、今どうなっているとか、何が求められているとかか、そういうことをしっかりと調査分析できる力がすごく必要だし、そこから視点を変えてほんっと飛びぬけるような発想力が欲しいですね。

鎌田 そうですね。生活感覚というか、結構地に足ついたよ

うな感覚。生活者としての視点というのは、すごく重要だと思うんですよ。

——それについては、すごく武庫女の学生は潜在的能力に恵まれていると思うことがあって、バランスというか、生活者として生活の中で喜びを感じたり、これをどういうふうにデザインしたらいいかを考えていく力はあるかなと。それを楽しめて、そういうことを論理的に、学術的にも考えられる力を持つてる人が結構多いなと思います。

鎌田 そう。それが結構求められているんだけど、なかなかアイデアが出てこないんですよ。北原先生にもちょっと関係するかもしれませんが、例えば設計課題で、人が集まるような場所を設計しなさいってなると、まあカフェなんですよ。その感覚を変えたいというか、世の中カフェだらけになるよっていう。それをもっと生活者の視点で豊かに、将来的に目指すところは幸せになるという、幸せ学びたいな……すごい自分で言っていて恥ずかしいんですけど、幸せに生きるための手法を学んでほしいところがあるんですよ。カフェだけじゃ幸せにはなれないよ、それも、複合的にどういったことがあるから豊かに暮らせるというような視点を何とか考えてほしいなと思っています。

水野 あるものを活かして、そこに住んでいる人、あるいはかかわっている人がいかに楽しく豊かに暮らしていけるかというところに持っていける力ですね。

地域のまちづくり

——まちづくりに携わる人に必要なスキルは、どのようなものだと思いますか。また、まちづくりコースの授業で、実際にまちに出かけて学ぶような具体例がございましたら、教えて下さい。

水野 やっぱまちを読み解く力があって、実際にフットワーク軽くまちに触れて、出かけるだけじゃなくて、いろいろな人としゃべったりとか、意見を聞いたりとか、観察できるみたいなおところですよな。そこから発想したことを形にすることや、具体化に向けての方策を考えることが必要だと思います。コースに分かれて、実際のまちにでかけることで学んでいきます。まちの調査から提案をおこなうというカリキュラムとして、「フィールドデザイン演習」が2年前期から始まります。また、「フィールドデザイン特別演習」は、短期間の合宿形式で集中的に学ぶプログラムとなっています。来年度は小豆島での開講を予定しています。

鎌田 実際に合宿に行って、島の問題や魅力を合宿形式でいろいろフィールドワークするのは、非常に有効かなと思うんですよ。

——そうだと思います。

水野 まちの調査はもちろん、産業や歴史文化など多様な



図4 東遊園地(神戸市中央区加納町)

テーマにも取り組みます。例えばですが、島の特産品である「島はも」をどう魅力的にブランディングしていくかとか、伝統行事が残っているのですがその継承のための仕組みを地域の方と一緒に考えるとか、幅広くまちを豊かにするような調査と提案をしてほしいと思っています。6コース制では、学生は2つのコースを選ぶわけですが、まちづくりと建築デザイン、生活デザイン、アパレルなど別の分野を学ぶことによりそのまちを多面的に捉えることもできるのかなと思っています。

北原 ここまでの話でメインになっているのは、住環境が多かったと思いますけど、最初の話で、まちっているいろいろな要素の集合だという話がある中で、もちろん住まうことも重要ですけど、自分はやっぱり自分の専門分野から、商業空間に興味があります。例えば、シャッター商店街みたいな問題もあるしね。もちろんこの島がどういう状況が僕は行ったことないからわからないですけど、産業を活性化させるということもきつとあるでしょうし、そういう意味では確かに、生活デザインコースの領域とリンクする点がたくさんあると思います。

鎌田 そういう意味でちょっとこれを見てほしいんですけど、尾道って、空き家だらけなんですね。尾道出身の豊田さんという方がこれじゃだめだということで、旦那さんが大工さんなんですけど、いろいろ物件を買いながら、商店街をコンバージョンしていくわけですね。「あなごのねどこ」というところがあって、これゲストハウスなんですよ。

こういうスキルって建築だけじゃないんですよ。イラストレーターが入ったりとか、市立芸術大学が近くにあるので、そこの学生が入って、とにかくやっぱりおしゃれなんですよね。こういうスキルって、やっぱりまちづくりにすごく重要な要素としてあると思うんですね。ただただまちの関係だけをつくるんじゃなくて、やっぱりおしゃれに。魅力というのは、こんなふうにつくれるかなというふうに思うんです。そういう場合には、やっぱりほかの分野と、いかにうまくコラボしていくか、協働していくかが重要ですよ。

そのためには、やっぱりサブコース、そういった関係性というのも非常に重要なのかなと思っていますね。

西脇に播州織工房館というのがあって、空間をまずリノベーションして播州織の拠点にしましょうというところから始まって、ブランディングしていったり、ファッションとして格好いい播州織って何だろうみたいなのところまで広がっていく方法って、どこまでが「まちづくり」かは、もうわからないんですよ。そういう複合的な、多面的な学びが、今本当に求められていると思いますよね。だから、今までは細分化されて別々でやっていたものがどんどん寄ってきているというような、それが役割分担それぞれ持ちながらもやっぱり協働していかないと今からは多分難しいんじゃないか。だから、



図5 住宅地計画、集落調査、まちづくりの立場から語る鎌田誠史氏

まさに今回コースが6コースになって、それを……

——組み合わせるという発想が。

鎌田 そう。組み合わせていくという発想はこれから必要だと思います。

——播州織の話が出ましたが、綿花をつくる、栽培するという部分が産業という意味では原点かと思うのですが、他にも例えば旭川の家具だったら木材とか、原点として、つくることの出発点ということに関して、アパレルコースや生活デザインコースとのクロスで学んだらどうなるか、お聞かせいただけます。

鎌田 例えば、茅葺民家を見るためには農業から始めろみたいな話ですよ、生態系からという。

——そうかもしれないですね。

鎌田 それもおもしろいんですけどね。

——そういう関心を持ってもらうと、多様性がより高まるかなって思います。

鎌田 そうですね、それはすごくありますよね。

坂口 以前、本校の図書館の制服にゼミ生と関わったのですが、兵庫県内で織られた生地を使うことになり、播州で作られたダンガリーを選ぶことになったんです。こうやってまちづくりとアパレルが繋がりますよね。

鎌田 僕、一個だけ聞きたいんですけどね、アパレルとまちづくりのコラボの可能性は、やっぱり難しいんですかね、産業という意味では。

坂口 いや、大丈夫といえますか、可能性はあるんじゃないですか。例えばまちづくりを学んで、サブコースでアパレルをとるというようなことで、商業、ビジネスに目を向けてもらうことと、リテール関係だと店舗展開、その店の置き方ですよ。そういったことを含めて、その場に、どういった商材を求めればいいのかを考えていくことができるんじゃないんですかね。新しいものを販売するだけではなくて。

例えば京都市内なんですけど、学生時代、市バスに乗ってうるちよろしているときに、目についたのがある洋服修繕のチェーンストアなんです。



図6 ファッション産業における実践的立場から語る坂口建二郎氏

鎌田 洋服の。

坂口 はい。要は、洋服をお直ししてくれるところ。今の時代、会社の社会的責任であったり、ものの持続性が問われていますよね。それらは会社だけではなく、個人にもかかわってくる課題ですよね。例えば我々がまちを選ぶ、住まいを決定するときに、学校はどうか、病院はあるのか、スーパーは近くにあるのか、それから最寄りの駅はどこなのかというようなことは条件として置くんですけど、生活を彩ってくれる洋服に関しての考えが及ぶと随分と違う社会に変わるように思います。例えばクリーニング屋であったり、洋服の修繕をしてくれるようなところは考えないし、実際なかなか見当たらない。ところが、京都市内だと、ちょっと調べてみるとその洋服修繕の店舗なんですけど、9軒あるんですよ。洋服の新しいものだけを供給していくビジネスではなくて、できたものを長く持続性のあるものに変換していく作業を、こういった人たちに支えてもらうと、違う関わり方でアパレルが注目されると思うんですけどね。

ですから、新しいものと持続させるものとで、全く物の見方は変わってくるんですけど、まちづくりとアパレルの関係というのは、そういったところでも考えられるんじゃないのかなと思います。

まちづくりのスキル

北原 都市計画も建築もインテリアも本当にシームレスじゃないですか。ただ、ハコの産業じゃなくって場の産業になるという話は実感として本当にそうだと思います。新しく建築をバンバンつくってあげばいいという時代じゃなくなっていくんじゃないかと思ったりするわけです。

例えばさっきの話で、にぎわいを創出するのに学生はカフェという発想があるっていう話が出ましたが、それって本当にハコが何とかしてくれるみたいな発想じゃないです

か。ハコ幻想みたいな。でもそんなのもう幻想でしかないというか、やっぱりもうハードの時代じゃなくて、いかにソフト的なコンテンツを創出できるかという話だと思うんですよ。生活デザインコースなんてまさにソフト的なブランディングであるとか、ソフトの提案が得意な学生が非常に多いと思うんですよ。だからそういう意味では、まちづくりコースとの相性はかなりいいだろうなという気はしますよね。何かハードをつくるという発想、もちろん必要に応じてつくるにしても、ハードをつくれれば全てが解決するみたいな発想じゃ、もはやないだろうという気がするという意味では、ハコから場に行くというのは、本当にそうだなと思いました。

鎌田 今おっしゃっていたコンテンツをつくっていくということで、やっぱり経験値も要るじゃないですか。だからやっぱり生活者としての、暮らすということを考えていくことも、学生には求めたいですね。

僕の理想としている学生、例えばこういうふうになってほしいなという人が実はいて、僕の先輩なんですけど、今はもう専業主婦なんです。ただ、七夕になると、住んでいるマンションに勝手にディスプレイしているんですよ。そして、そこに「短冊を書いてね」みたいなのを、ただただ置くという。建築を学んで、発想もすごく、そういう経験をもって日常生活を楽しむ力を持っているんですよ。そのスキルがあれば、今言ったようにカフェ、ハードに頼らなくても何か楽しくなっていくんじゃないか、我々は日々の演習にもそういう視点を考えながら取り組んでいかないといけないと思うんですよ。新しく建築しなさい、という時代では確かにもうないので。

水野 私は職についてはもちろん何らかの社会貢献できるような人材を送り込むというのが、大学としての使命かなと思います。卒業時に求めるものとしては、地域にしっかりと貢献できるというところを目指したいと思っています。

北原 卒業して主婦になって、職を離れたけど、自分の住んでいるマンションでそういうコミュニティをつくり出せるというのは、すごいスキルですよ。小さなコミュニティの中かもしれないけど、そういう社会貢献もできるという意味では、すごくいいことだと思う。

鎌田 だから、職と生活とどっちもあってもいい。それから、いろいろなものを外に出て見に行く授業をやるじゃないですか。それってすごく重要な気がする。フィールドワークでまず阪神間の魅力を探りに行くというのがベースなので、期待したいところなんですけどね。歴史から掘り下げていくような工夫はするつもりなんです。古地図レベルから重ねて行って、今ここにこうなっているという、災害も何回も来てるんやみたいな。

それで今考えているのは、「プレゼンテーション演習」を僕が持つんですけど、そこでやろうと思うのは、デジタルを

ほとんど使わずに、とにかく手書きでおもしろく表現できる力と、それを大きなビジュアルにするところまでやりたいな。それができる人少ないんです、実は。デジタルで結構できる人いるんですけど、手でぐわっとその場で書いていく力。意外とよく見ると上手じゃなくても、何となくバランスがよかったら結構説得力があるんですよ。その成功体験をもし持たせることができれば、卒業研究とかもちょっと変わってくるかなという期待はあるんですけどね、表現する方法論として。

北原 デジタルってやった気になるからね。

鎌田 そうそう。

坂口 手を動かすことは大切だと思いますよ。

鎌田 あと、多分これは別の議論になりますが、生活環境という言葉将我々はもう一回いろいろな議論をしないといけないと思うんです。生活環境学科でしょ。一番上にあるのはやっぱり生活環境という言葉じゃないですか。それにまちづくりとか建築デザインとかというのがひっついてますよね。この部分、もう一回議論する必要があるって最近すごく思うんですよ。

生活中心のまちづくり

——まちづくりのコンテンツとして生かされて、服などがまちをつくっていくような事例で、アパレルやファッションの事例とか、坂口先生の経験で、ほかの例は御存じですか。

坂口 今いろいろお話を伺っていて、協働していくことは、非常に大切なところだと思います。1つの磁力に引き寄せられるといいますか、そういう集合になっていくことも重要なんでしょうけど、ある意味分散といいますか、ワンロケーションでおこなっていてもなかなか成立しづらいことかなとも思います。いかに周辺の地域を入れ込んで、その動線をつくっていくかも重要だと思うんですよ。

僕は分野上、ターミナルとか、商圈をよく歩き回るのですが、東京へ行くと必ずと言っていいほど寄るのが丸の内です。あそこの仲通りの開発は、たかだか1.2kmほどですけども、商業だけに頼らない空間づくりというんですか、そういったことができているのがすばらしいなと。

で、ヒューマンスケールをいかに重要視するかということ、人が主役であるということ、やっぱり忘れてはいけないと言えるのかなと思うんです。衣服も人が主役でありますし、住まうということもそうですけど、日本の場合、車中心の社会と考えるようにまちがつけられてきて、利便性ばかりが重要視されたまちになってきた。ところが丸の内仲通りに関しては、もともとの車道9mあったものを両サイドの6mの歩道に1mずつ分けたことや、パーキングの入り口を仲通り沿

いにつくらなかったことで、人が主役であることを生み出したまちだと思います。ですから、集約だけより、少し距離感を持つことも重要ではないのかな、と感じたりしますね。

水野 大手町・丸の内・有楽町のあたりは、公民連携でエリアマネジメントが進められているエリアですね。自治体や企業、団体がこういうまちにしたいという将来像を共有しながら、まち並みを整えたり、まちを楽しむイベントを開催したり、まちの賑わいづくりや魅力づくりのさまざまな取り組みをされていますよね。

坂口 いかにそこで生活の時間を持つかという考え方があれば、アパレルでいう「ディスプレイ効果」があると思うんですね。でもヨーロッパで見ると、パリのサントノーレであたりモンテーニュであたりのファッションストリートは、夜になったら誰も歩いてないですよ。ひとりで調査に行くのも怖いぐらいひっそりしています。そういったところで、誰に見せているのかな、そのディスプレイは、ライトアップまでして。

——でも人がいないんですか。

坂口 人がいないんですよ。やはり、人がいてこそそのディスプレイなので、営業時間だけではない、その後もきちっと見てもらえることを考えた商業提案や、人が主役で歩いて楽しい生活中心のまちづくりが重要だと思いました。

お話を聞いていると、空き家とか、今すごく手を加えていけないという話のようですが、ターミナル界隈に視線を向けることはないでしょうか。

水野 いえ、おっしゃるとおり、まちづくりは「住まう」ことだけではなくて、今のお話にありましたように、都心部での取り組みももちろんあると思います。商業・業務エリアであっても、単に「買い物をする」「働く」ということだけでは魅力的なまちではなくて、歩いていて楽しい、時間を過ごしたくなるという話はとても大切で、車中心でつくられていたまちが、人間の生活の場にとりか、人間が歩いて楽しい場にとりか、ヒューマンスケールのまちに、というようなところにシフトしつつあります。

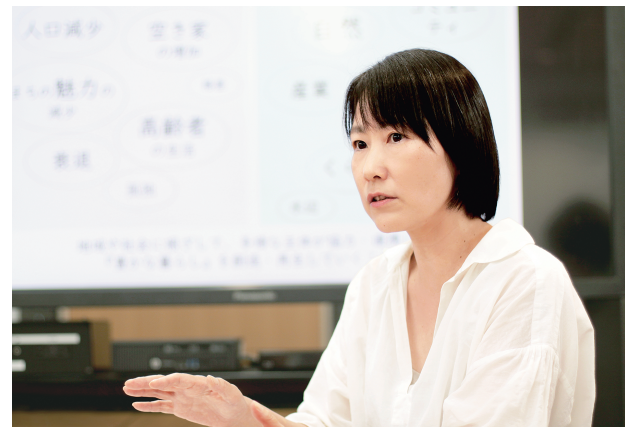


図7 都市計画・まちづくりの立場から語る水野優子氏

坂口 関西に目を向けますと、神戸の旧居留地が良い例だと思います。百貨店を中心に、路面店が良いバランスで立ち並んでいますよね。

水野 神戸の旧居留地は、明治初年の兵庫開港にともないつくられた外国人居留地としての成り立ちがあるわけですが、そのまちの特性を活かして、歩いて楽しい、賑わいのあるまちづくりを展開されていると私は思っています。エリアのビルオーナーを中心に構成される旧居留地連絡協議会という組織があるのですが、阪神淡路大震災の復興の過程で、旧居留地らしさを守りながら賑わいを取り戻すためにまちなみや建物のデザインのルールをつくるんですね。例えば、人が憩える広場空間をつくったり、ヒューマンスケールの建物のボリュームを設定したり。そこが評価されて、ハイブランドなども出店されているんですね。

坂口 そうですね。ハイブランドを中心に展開されていますが、百貨店の中やファッションビルの中では味わえない人と店の関係が生まれているように映ります。それがまち全体を魅力的な環境へと押し上げているようですね。

水野 旧居留地やその周辺では、KOBE パークレットの取り組みをしていますよね。道路空間の一部を活用して、憩いの場をまちの中につくるプロジェクトです。また、さきほどまちなみや建物のデザインのルールのお話をしましたが、積極的に広場空間を創出していこうとしているわけですが、例えば大丸百貨店では広場空間の一つであるポルティコ部分をもととオープンカフェにされていて、まちの賑わいづくりをしているんですね。まちのオープンスペースを使って、まちを訪れる人が楽しめるすてきな空間演出を頑張っておられるエリアという認識があります。

坂口 守ることも、重要なことだと思いますよね。今の空気感というか環境とか。変化したまちの例としては大阪を代表する大きな商圈である南エリアが挙げられますね。

大阪アメリカ村もその一角ですが、店舗数が増え、人と人が近すぎるのかなと思います。以前はまちの空気がゆっくりとしていたように記憶しています。人と人の距離間を大切に

と考えていた人たちは、南船場へ移動し、その後は堀江が注目されるなど、隣接したエリアでの移転が行われましたね。

水野 確かに移っていったりはしますよね。

坂口 変遷の繰り返しはあまり良くないですね。総合的に捉えた南エリアのまちづくりを見せていただきたいと思いますね。北エリアにはできない要素を多く持っていますからね。

水野 自然発生的な場というのは何もしなければ移ろっていくものですね。それを移ろわせない努力をしようとしているのが、例えば先ほどの旧居留地みたいな話なのかもしれないです。

坂口 守っているところ？

水野 守って高めるみたいな。旧居留地なんて、震災のときに壊滅的な打撃を受けていて、ぼろぼろになった状態で、もう一回自分たちのまちの「らしさ」を考えて、デザインルールとか、あるいはつながり方であったりとか、お店の入れ方であったりとか、回遊のさせ方であったりとか、そういったことを考えながら復興されてきているんですね。だから移ろっていかないし、使い捨てにならない。

坂口 長い目で見て人が集えるところをつかんでいかないと、一時的な目先のことだけでは、すぐ倒れてしまう企画になりますよね。

水野 「まちづくり」というと、形ある「もの」や「こと」をデザインしたり人と人とのつながりをつくるといったことがイメージしやすいですけども、将来像を共有することやまちや建物のルールをつくる、仕組みをつくるといったこともとても大切なことなんです。

鎌田 再開発、今結構やっているじゃないですか、駅前とか、渋谷とかもやってますけど、あれってすごく洗練されていて格好いいですよ、全部。でも憩うという意味では全くないじゃないですか。

水野 ただ、最近「身の丈再開発」ってよく言われていますよね。再開発っていうと規模の大きいものをつくるイメージがありますが、最近その反省から、単に巨大なものではなくて住んでいる人たちが求めるようなコンパクトな再開発をしていこうとする流れがあります。再開発もやっぱり方向転換を求められている時期なのかなという感じがします。

デザインを超えて

北原 さっきの鎌田さんの話、僕も本当にそう思うんですよ。ちょっと自分の仕事を否定しかねないところもあるんですけど、自分はインテリアデザイナーとして結構しゃれたレストランをデザインしたりするわけです。でも自分自身はしょっちゅう行きたいとは思わないわけですよ。だって小じゃれた



図8 商業空間のインテリアをデザインする立場から語る北原摩留氏

空間って気疲れするじゃないですか。デートをするとかだったらいいかもかもしれませんけど。

鎌田 非日常的ね。

北原 そうそう。だから僕が東京でいつも行くのは、京浜急行線という庶民の私鉄の立会川駅前にある、昭和テイストのもつ焼き屋だったりするわけですよ。そこって超ぼろぼろなんですけど、そういうところが落ちつくんですね。メニューもおやじの手書きでランダムに短冊が貼ってあるような、アノニマスのデザインという感じです。そう考えると、デザイナーによる小綺麗でよそいきな空間で憩いの場を本当につくれるのか、すごくジレンマがありますね。

鎌田 なるほど。

水野 だから、計画し尽くさないという話ですよ。

北原 そうなんです。

水野 ただ、私は、まちはそれぞれゴールが違っていいと思っていて、そのまちにはそのまちの「らしさ」があると思うんですよ。私もそのもつ焼き屋さんすてきやなと思いますけれども、一方でおしゃれなところもすてきじゃないですか。

鎌田 おしゃれな方向という、でっかい一個のベクトルにみんな向いている気がするんですよ。例えば沖縄に僕よく行くんですけど、本当にごった返しているような場所が、再開発してめちゃくちゃきれいになったんです、ホテルができて。誰も来てないんですよ、もう。

———沖縄にそういうところ求めてないというか。

鎌田 そうそう、その場所、場所で、その場所の魅力みたいなものは、やっぱり一個一個考えていかないといけないかな。

水野 だから、やっぱり「らしさ」ですよ。

北原 確かに渋谷も、大手資本の手によって次々と開発が進む一方で、昔から根づいていた古い飲み屋みたいなのがどんどんなくなって。ハレとケでいうとケの場がなくなって、完全にハレの場になってしまった。逆に、僕が行く立会川というところは日常そのものでおしゃれなところがひとつもなく。もうちょっと混じててもいいような気がする。完全に色分けが白か黒かみたいな。

水野 私は、違いがあったほうがおもしろい。

北原 でも違いが大き過ぎても、どっちもテーマパーク化しているというか、すごいおしゃれなテーマパークと、すごい日常的なテーマパークみたいな感じになって。だから、それが逆にちょっと気持ち悪い気がしますね。

鎌田 セット感が出るよね。

北原 そう、どっちもセット感がある。

水野 いや、ただ「普通の」まちのほうが圧倒的に多いじゃないですか。

北原 まあ、確かにね。

水野 だから、個性が立っているようなところというのは、

すごく貴重なんだと思います。ないところにはつくっていく、あるところはそれを守っていくということじゃないですかね。

坂口 旧市街と新市街のバランスというか、そういったところを両方見ていかないと、なかなか安定するところにはいかないのかなと思いますよね。

鎌田 だから、今みたいな議論も学生なりにやったら楽しくなりそうですよね。まちの魅力ということで言うと。

水野 そうですね、そのまちの魅力は一体何なのか、というのを突き詰めていくことは、すごく必要なこと。

鎌田 意外とおもしろい意見も出るかもしれないよね。

———若い女性ってひとくくりで言っても、みんな趣味趣向は全然違うわけですから、求めるものも違うかもしれないですね。

水野 あと、まちづくりでは、自分の価値観だけでなく、自分と違う人をイメージするとか、他者をイメージするとかが大切なのかな、と思います。

北原 そうですね、やはり都市ってダイバーシティですからね。いろいろな人がいる集合体がまちだからね。自分の価値観だけでなく、いろいろな価値観を尊重して理解しながら、多様に考えていけるような人材になって欲しいですよ。

水野 いろいろな利害関係を調整しながら、なおかつその地域の文脈を読み解きながら、「ここだったらどういうことができるか」みたいな発想をしてほしいなという気がします。

北原 いい人材がいっぱいいそうじゃないですか。

鎌田 まとまりましたね。

※1 旧ゴルフ場の地形と自然を可能な限り残しながら豊かな住まいを創るプロジェクト。UR 都市機構と神戸芸術大学の協働による新たなニュータウンの計画。

※2 大牟田市の高齢化統計資料，大牟田市，2019

※3 空家率 13.6%…住宅・土地統計調査，総務省，2018 年 10 月時点

※4 松村秀一：建築—新しい仕事のかたち 箱の産業から場の産業へ，彰国社，2013

※5 「パブリックオープンスペースの一形態である公園という生活の舞台を創り、守り、活用していく総合的な仕事のシステムであり、極めて長い時間と経費と労力を要する仕事」

田代順孝・中瀬勲・林まゆみ・金子忠一・菅博嗣編著：パークマネジメント - 地域で活かされる公園づくり，学芸出版社，2011

写真提供 /

図1 ガーデンシティ舞多間みつけプロジェクトの住宅：鎌田誠史

図2 リノベーションミュージアム冷泉荘：スペース R デザイン

図3 てんしば：水野優子

図4 東遊園地：水野優子